

1994. 4. 16~17

## 火打山・澄川

メンバー…L岩、小森宮、山崎、手塚

16日(快晴)朝、妙高高原駅よりタクシーで杉ノ原スキー場に向かい、ゴンドラとリフトで1855Mまで労せずして登る。快晴無風の上天気にとっとくりだした山スキーヤーとテレマーカーで、結構なにぎわいだ。とは言っても十数人位だろうが、閑散としたスキー場ではやけに多く感じる。山腹を巻き込みながら少しずつ高度を上げ、三田原山まで2時間かけてゆっくり登る。すぐ隣には妙高本峰、はるか遠くには後立山の峰々と、山々の展望も完璧だ。山頂からは沢状の所を一滑りすると黒沢池に到着する。沢状地形はさほど顕著なものではないが、立ち木が全くなく、快適に滑れる。黒沢池は広大な雪原状態で、ぼかぼかといいい気分で大休止する。そこから稜線までもう一登りしてから、シールのまま高谷池ヒュッテまで真っ平らな樹林帯の中を進む。高谷池ヒュッテは、3階のみ開放しており、ござがしきつめられ、寝具まで揃っている。部屋の角にあるパイプに使用料一人当たり1000円をねじこむと、2階に落ちる仕組みになっているのが、おもしろい。ガラス窓からたおやかな火打の稜線も見え、のんびりのどかな雰囲気、午後はヒュッテでゆっくり快適に過ごす。一休みしてから、手塚のみ火打の山頂まで出かける事にした。ほとんどの人はあす登頂する予定なのか、小屋の賑わいに比して、外はいたって静かだ。ゆるくゆるく山腹をトラバースして、火打の肩からはつぼ足のトレースをたどると、山頂はすぐだった。火打に登るのは久しぶりのはずだが、山頂からの展望がなぜか見慣れた風景に思えるのは、すごく特徴ある焼山北面台地が忘れがたい印象を与えるせいかな、と思う。帰路、澄川源頭部を覗いてみる。滑り出しはかなり急だが、その下には帯状にうねるゆるい沢筋が伸びており、これなら大丈夫と安心する。(もともと、この日のぐずぐずの雪では、かなりの急斜面でも大丈夫そうに思えただろうが。)高谷池ヒュッテは、次々と、7時頃になっても到着するパーティーがあつて、3階の上の屋根裏部屋まで超満員となる。

17日(曇りのち晴れ)明け方から風が強く、出発の頃からガスってくる。一時雪も降ったりして、ヒュッテに泊まった人達も皆あせっているようだ。これ以上崩れる前に頂上を踏んでしまおうと、次々と山頂に向けて出発していく。私達も予定通り澄川目指して出発する。雪面はもちろん堅かったが、南風で冷込みもなかったせいか、エッジはちゃんとかかるようで、まあこれならば大丈夫かなと思いながら、昨日の長いトラバースを繰り返す。火打の肩に着いた時は、山頂はガスの中だったので、即澄川を下る事にした。滑り出してみると、雪は登りで想像していたよりも堅くて緊張したが、数回転で傾斜もゆるみ、その後は安心して滑りを楽しめる。それでもしばらくは雪が堅くて脚が疲れたが、雪崩が恐いので休まずにどんどん下る。それにつれて雪質もどんどん変わり、ぐずぐずの雪を滑り、デブリをいくつも越え、やがてほとんど直滑降の滑りになって黒菱川との出合にでる。ここはもうすっかり下界のうららかさで、大休止してからシールで尾根に上がる。うまくルートを選んでいくと、シールで楽々登っていける程度の傾斜だ。稜線に出ると、朝の天気の影響もすっかり回復し、純白の山々の大展望が楽しめる。登りももうないし、危ない所もない穏やかな稜線で憩うのは本当に楽しい。ここから発電所までは尾根筋を滑るが、平坦な所とドーンと落ちる急斜面とが交互に現われ、まるでおおざっぱな階段のようだ。

発電所に着いて「やれやれ終わった」とタクシーを頼もうとすると、発電所は「まさか！」の無人だった。認めざるをえない現実に、「仕方がないや」とスキーを担いで登りだすと、何と幸運な事に林道は除雪されていないではないか。即スキーを付けて滑りだす。といっても、ほとんど平坦であまり滑りはしないのだが、スキーを担ぐ事に比べれば天国を歩む気分だ。広い広い雪原にたおやかに連なる妙高、火打、そして大毛無山の大パノラマを眺めながら、フィナーレの果てしもない直滑降を堪能し、岡沢の集落到到着。スキーを担ぐのは、ここからバス停までの10分程ですんだ。岡沢は、桜が満開だし、春の花々繚乱の美しさ、お花見のおまけまで着いて大満足の澄川滑降だった。(手塚 記)

[TIME]

	9:10	11:00	11:50	12:20	14:50
16日	リフト上1855M	三田原山	黒沢池	高谷池ヒュッテ	火打山
		11:15	11:23	13:25	14:40
	15:07				
	高谷池ヒュッテ				

	6:45	7:40	9:25	10:15	11:30	13:00
17日	高谷池ヒュッテ	火打の肩	黒菱川出合	稜線	第三発電所	岡沢
		8:00	8:47	10:45	11:14	

